



今回は、三重短期大学名誉教授で、津市男女共同参画審議会会長の東福寺一郎さんから、男女共同参画に取り組むことになったきっかけや、津市の現状についてお話を伺いました。



東福寺 一郎さん

男女共同参画について取り組むことになったきっかけを教えてください。

私の専門は心理学で、初めから男女共同参画や女性学の研究をしていたわけではありません。しかし、当時の三重短期大学長からの依頼を受け、2000年に開催された「日本女性会議2000津」の準備委員会・実行委員会に参加しました。そのときには、日本女性会議とは何か、男女共同参画とは何かなど全く知らないまま応諾したのですが、私にとって男女共同参画に没頭するきっかけになりました。

「日本女性会議2000津」はどのような会議だったのですか。

「日本女性会議」は、男女共同参画に関する国内最大級の会議として、男女平等社会の実現に向けた課題の解決策を探るとともに、参加者相互の交流とネットワークづくりを目的に1984年から毎年開催されています。2000年11月に三重県総合文化センターを主会場に、二日間にわたり全国から延べ4,000人以上が参加して開催されました。



日本女性会議2000津 分科会の様子

ご自身の意識にも変化がありましたか。

私自身の子どもの頃を振り返ると、学校の授業では家庭科は女子、技術科は男子と分かれていましたし、結婚してからも、家事の大部分を女性である妻が担っていました。当時の私は、そのことに疑問を感じることはありませんでした。

しかし実行委員会で、社会の中で女性が置かれている現状や、男女平等社会の実現に向けた課題につ

いて議論を重ねることを通して「女性の置かれている状況を放っておけない」という思いを強く持ち、日本女性会議2000津開催以降も県内において、市町の現状や学生の意識についての調査や男女共同参画に関する講演などの活動を続けてきました。

こうした経緯の中で「男は仕事、女は家庭」といった固定的性別役割分業観を明確に否定し、また意識的に「家内」ではなく「妻」と言うようにするなど、日々の生活においてもジェンダーに敏感になってきました。



日本女性会議2000津 会場の様子

男女共同参画について、現状や今後の展望を聞かせてください。

国別の男女差を測るジェンダーギャップ指数という指標があります。2022年、日本の順位は146か国中116位と低位にとどまっていますが、主たる原因は政治や経済の分野における女性の参画が遅れているためです。また、津市の市民意識調査からは、男女共同参画という言葉を知っている人の割合は8割に近づいていることや、学校では男女平等が実現しつつあると認識しているものの、家庭、職場、地域社会では男性の方が優遇されていると考えている人が多いことが分かります。

私は、男女共同参画を推進することは、多様性を受容するための突破口だと考えています。全人口の約半分を占める女性が、他の性である男性と対等に社会参画できないようでは、マイノリティ(少数派)の人々が大手を振って社会参画することは望むべくもありません。男女共同参画社会の実現は「多様性と共存社会」への試金石とも言えるのではないのでしょうか。